

別府海岸における背後地域と海岸との関係性および空間整備への反映方法に関する研究*

Studies of the relations between the Beppu Coast and its neighboring area
and approaches to reflect their relations on development*

安藤義宗**・鈴木洋***・上島顕司****

By Yoshimune ANDO**・Hiroshi SUZUKI***・Kenji UESHIMA****

1. 序章

(1) 研究の背景と目的

一方、国土交通省は、現在、海辺と人々の繋がりを回復するための「里浜づくり」を推進している。そこでは、地域の人々が、地域と海岸の繋がりについて議論し、その繋がりを培い育ててゆくものとしている¹。これは、海辺のあるべき姿とは一様に存在するのではなく、地域ごとの人々との関係性のもとに存在するということを前提とした考え方へシフトしつつあると考えることができる。したがって、今後の海岸の空間計画の立案にあたっては、地域との関係性を丁寧に読み取り、それに十分、配慮した上で、海岸の空間整備を行うことが益々、重要となってくる。しかし、未だ、海岸と言えば、白砂青松あるいはニース・カンヌを規範とする一律の空間整備が行われがちである。これは、地域と海岸との関係性及びその読み取り方、実際の海岸空間整備への反映方法については明らかになっていないことにその要因があろう。

このため、本研究では、現状で、特によく分かっていない課題といえる

- ・現在、実際の海岸の空間整備がシフトしつつある、郊外とでも言うべき地区（高度経済成長期以降に宅地化された地区。もともとの中心集落は内陸にあった）における、もともとの集落と海岸との関係性
- ・複数の海岸を持つ都市における内陸を含めた地域とそれぞれの海岸との関係性

について明らかにし、実際の空間整備への反映方策について検討することを目的とする。

*キーワード：景観、空間整備・設計、海岸計画

**非会員、(株)地域開発研究所

(東京都台東区東上野 2-7-6 東上野 T・I ビル
TEL03-3831-2917、FAX03-3831-6259)

***非会員、工修、(株)地域開発研究所

(同上)

****正員、農修、国土交通省国土技術政策総合研究所

(神奈川県横須賀市長瀬 3-1-1
TEL046-844-5033、FAX046-844-4161)

(2) 対象

本研究では、大分県の別府海岸を対象とした。これは、

- ・現在、別府海岸のほぼ全域にわたって構想・整備計画を検討中であること。
- ・海岸線が延長 10 km に及び、白砂青松、磯浜、都市的海浜と多様な形態の海岸からなること。
- ・背後地域も中心市街地、郊外地、住宅地、漁村等、多様であること。

ことによる。

2. 研究の方法

(1) 対象期間

本研究では、上記の目的のために、海岸の各背後地域（内陸も含む）に住む人々が、もともと、どのように海岸を利用してきたのか。また、その付き合い方は、現在では、どのように変化したかについて把握、分析を行う。比較の対象とする時代は、別府海岸が大きく変容する以前の昭和 20 年代とする。

(2) 昔の集落の抽出と古老の抽出

まず、古くから続く集落に、昭和 20 年以前から、現在まで住んでいる古老に対してヒアリングを実施することとした。古くから続く集落の抽出にあたっては、

- ・市史等の文献及び地元の歴史家へのヒアリングにより、学区や神社の氏子圏の範囲等からひとまとまりとなる集落の範囲を確認した。
- ・昭和 20 年代の航空写真と現在の地形図等を重ね合わせることで、集落の位置を確認した。
- ・別府市の北から南まで、抽出した集落が適当な間隔となるようにした。

その結果、明治ごろには成立していた旧街道沿いの亀川、平田、上人が浜、石垣、楠、北浜、浜脇の 7 つの集落を抽出した（平田、上人ヶ浜、石垣は内陸集落）。

各集落の空間構造について、市史等の文献、旧版地形図や航空写真、ヒアリングから把握した。

次に、抽出した集落において昭和 20 年以前に生まれ（概ね 65 歳以上）、その後も当該集落で育った人々を紹介して頂いた。平成 16 年 1 月から 9 月にかけてヒアリング対象者としての条件に合う計 27 名の古老に対し

てヒアリングを実施した。

(3) 現状の空間及び利用の把握

現状の海岸の空間構造及び人々の利用状況について、現地調査、既存のアンケート、ヒアリング等から把握した。

3. 別府臨海部の空間構造の把握

(1) 古くからの集落、街道等の位置

小倉街道（地元での呼称にならい、以下「旧街道」と呼ぶ）は明治9年に幅員5間の3等国道に編入された古くからの主要道路であり、海岸ではなく内陸を通り、北に位置する竈門から南の浜脇を結んでいた。古くからの集落は、この旧街道沿いに形成されている。背後に急峻な地形の迫る亀川、北浜、及び港を中心に古くから市街化した楠、浜脇が海岸の直背後に位置する集落であり、その他の集落は内陸に位置していた。今回対象とした集落及び街道の位置は下図のとおりである。明治以降、旧別府市街地周辺から宅地化が進み、現在では海岸線から西側のかなりの部分が市街化されている。

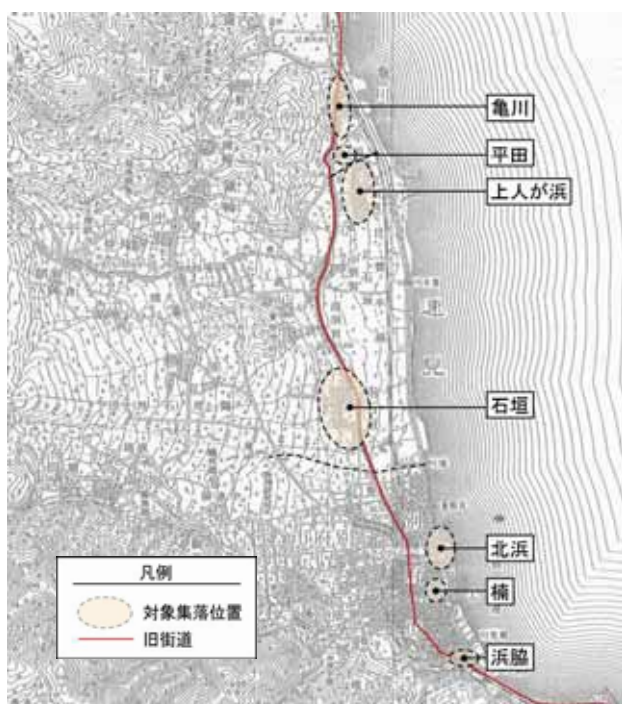


図-1 古くからの集落と街道の位置（昭和23年国土地理院発行の5万分の1地形図を基に作成）

(2) 別府の海岸線の変遷

一方、別府の海岸線については、明治4年に楠港が築港された後、近代の都市計画（明治末～昭和初期）、戦後の別府国際観光温泉文化都市建設法制定後（昭和20年代）、高度成長期（昭和40年代）の大きく3つの時期に変容している。明治期の別府の海岸線が、延長10kmにわたり、砂浜や磯浜が続いていたのに対し、こう

した開発により各地で埋立が行われた結果、現在の別府の海岸線は、一部を残して自然海岸はほぼ喪失、埋立地に接する海は急に深くなっている。そのため現状では、ほとんどの護岸が消波ブロックで固められ、海岸へは容易に降りることができない状況となっている。



写真1 明治期の別府海岸²

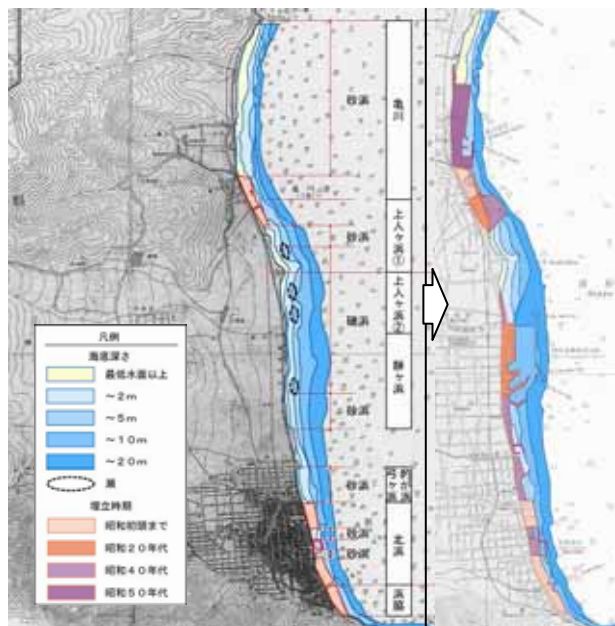


図-2 海岸の名称と海岸線の変遷（左：昭和13年の海図を基に作成。右：平成12年の海図を基に作成）

4. 各集落と海岸との関係性

(1) 海岸との付き合い方のパタン

各集落において、集落前面の海岸及びその他の海岸についての利用の有無、行為の内容、頻度等を把握し、整理した。その結果、上人ヶ浜や石垣等の直接に海に面していない内陸の集落であっても、前面の海岸を利用していることが分かった。また、各集落では別府の海岸線全てを一様に利用しているわけではなく、利用域と非利用域に分けることができた。このうち、利用域において、行う行為を、人々の海岸との付き合い方のパタンとして、4つに整理した。それぞれのパタンについて、以下、説明する。

a) 前庭型利用（生活＋遊び一体型）

海岸に近接した集落における、集落前面の海岸との付き合い方に多く見られるパタン。海岸の利用頻度が高く、

海水浴などの遊びから、のり、魚介類を採る、牛を洗うなどの生産活動、また、海水を汲む、手を洗うなどの日常生活と密着した形で利用しているパターンである。昭和20年代までの亀川、平田、上人が浜の集落における各集落前面の海岸との付き合い方がこれにあたる。

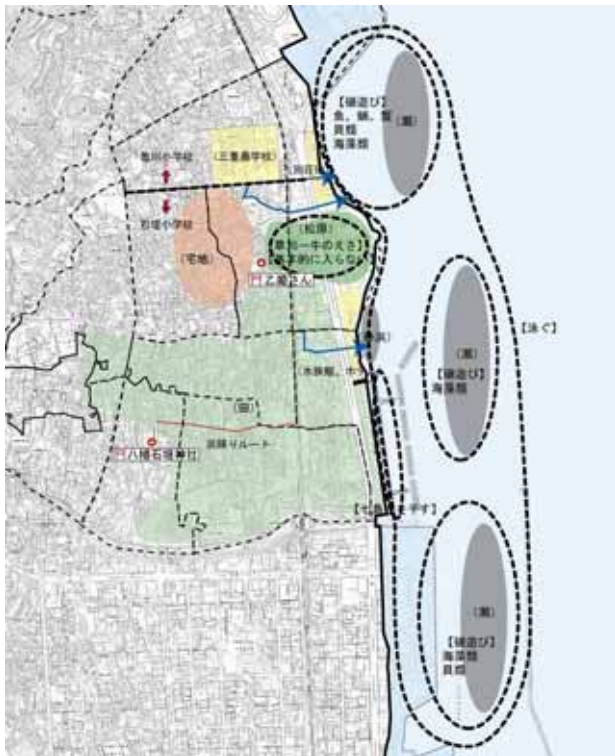


図-3 前庭型利用（生活+遊び一体型）の例：上人が浜地区とその海岸との付き合い方

b) 前庭型利用（遊び型）

上記と同様、利用頻度は高いものの、生産活動や日常生活に係る行為が見られず、魚介類を採る場合も主に遊びに限るなど、生活上の海岸への依存度が上記に比べ低いパターンである。楠、浜脇における前面の海岸との関係がこれにあたる。なお、こうした付き合い方は、海岸空間の状況や生業と関連すると考えられ、ヒヤリング対象時点である戦後には埋め立てられていた楠や北浜においても、戦前においては上記の前庭型利用（生活+遊び一体型）の関係があったと考えられる。楠や北浜で見られた前面の港で囲繞された水面で泳ぐ行為もこれに含めて考えることができる。

c) 郊外型

利用頻度は上記2つのパターンと比較すると大分低く、非日常的な体験を求めてわざわざ足を運ぶ、といったパターンである。多くの集落における関の江や餅が浜との付き合い方に見られ、学校の遠足などや家族との休日の行楽の目的地となっていた。この場合の行為は、海水浴が中心であった。

d) 遠征型

前庭型利用と、郊外型の中間に当たり、前庭型利用と比較すると大分利用頻度は低いものの、日常生活の中で、自らのなわばりを越えて、たまに遊びに行ったり、貝を採りに行ったりするパターンである。石垣における上人が浜や餅が浜、北浜における的が浜との関係に当たる。

(2) 海岸に対する認識の違い

こうして得られた各集落における各海岸との付き合い方をさらに比較、分析すると、以下のことが分かった。

a) 同一海岸に対する認識の違い

集落によって、同じ海岸を異なるパターンで利用している場合がある。例えば、上人が浜の集落と集落前面の浜は前庭型利用（生産+遊び）の関係性にあるが、隣接する平田、亀川では非利用となっている。上人が浜の集落では「上人が浜において多くの貝など得られ、磯が豊かだった」とのことであったが、平田、亀川の集落では、「平田町の前面は、多くの貝などを得られた豊かな磯であったが、上人が浜では、ほぼ何も得られず、利用していなかった」とのことである。

つまり、上人ヶ浜と平田は、同一の海岸を異なって認識していたと考えられる。なお、上人ヶ浜と平田の町界を流れる平田川以北の町では、お正月に、亀川北部の竈神社にお参りするのに対し、平田川以南の上人ヶ浜、石垣町などは、八幡石垣神社にお参りする。すなわち、集落圏が異なると考えられ、このことが、このような認識の差を生じさせる原因となっているとも考えられる。

また、このことから、海岸空間整備に係る住民参加を行う場合、直背後の住民のみを対象にすることは、不十分となる可能性があるため、隣接する地域や内陸の地域住民も対象にすることも必要となることが分かる。

b) 海岸利用の住み分け

さて、各集落における海岸の付き合い方の違いを更に見ていくと、前庭型利用の隣接集落においては、当該海岸は、非利用であること、遠征型、郊外型の利用が行われるのは、集落が直背後になく、前庭型の利用がされていない場所であること、が見て取れる。このことと、先の認識の違いを勘案すると、同一の海岸を複数集落が重層的に利用する仕組みがあった可能性がある。

c) 属性による差

利用のパターンは属性（年齢・性別等）によって異なると想定される。例えば、石垣においては大人は上人が浜を利用していたのに対し、子供は餅が浜を利用していたという。「前庭型利用（遊び型）」「遠征型」は、主として子供主体、「郊外型」「前庭型利用（生活+遊び一体型）」は大人+子供の利用と思われる。

(3) 別府全体における海岸と地域との関係性の構造変化

表-1 昭和20年頃の各地域における海岸との付き合い方のパタン

海岸	地域	亀川	平田	上人ヶ浜	石垣	北浜	楠	浜脇
関の江		[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]
亀川		[前庭型利用(生産+遊び)]	[遠征型利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]
平田		[前庭型利用(生産+遊び)]	[前庭型利用(生産+遊び)]	[前庭型利用(生産+遊び)]	[遠征型利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]
上人ヶ浜		[非利用]	[非利用]	[前庭型利用(生産+遊び)]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]
餅ヶ浜		[非利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[遠征型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]	[郊外型利用]
的が浜		[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[遠征型利用 非利用]	[非利用]
北浜		[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[前庭型利用(遊び) 非利用]	[非利用]
浜脇		[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[非利用]	[前庭型利用(遊び)]

昭和20年代と現在を比較すると、地域と海岸の関係性の構造変化として以下の2点を挙げることができる。

利用パタンの対象海岸が消滅、変遷している。

a) 郊外型

的が浜、餅が浜と、南から北へと郊外的利用がなされる海岸が推移している。現在は上人ヶ浜、関の江海岸がその対象となっている。

b) 前庭型(生産+遊び)、c)前庭(遊び)、d) 遠征型

消滅し現存せず。

海岸を多様に利用することがなくなり、海岸を一様に捉えるようになった。

海岸を利用の方法によって使い分けることが少なくなった。つまり、多様な利用の方法がなくなり、海岸との付き合い方が貧しくなったといえる。例えば、「上人ヶ浜」は、どこかの地域というより、別府全体の「郊外的利用」の対象である。このように、海岸を一様に捉えるようになった。

5. 海岸の整備の方向性の設定

以上の結果をもとに、現在、開発が構想・計画されている地区について、整備の方向性を検討する。

上人ヶ浜地区

現在、別府における「郊外型」利用の拠点である上人ヶ浜は、通常であれば、自然風景の卓越した郊外型の利用拠点という整備方針が設定されることになる。しかし、本調査により、同海岸は、平田町、上人ヶ浜地区等の背後地域の人々の前庭型の利用に供され、しかも、そこには、磯との豊かなつき合いがあったことが分かった。従って、当該地区の整備の方向性としては、「郊外型」利用の拠点という観点のみならず、背後地域の人々が、日常的に訪れることができるような、背後地域からの円滑なアクセスの確保等及び「海辺との豊かなつきあい」の復活のための磯の保全・復元を目指すことが考えられよう。

餅ヶ浜地区

現在は、利用密度も低い。従来は、別府の真ん中に位置することから、北浜地区以南の人々にとっても、石垣等の人々にとっても、徒歩圏における「遠征型」「郊外

型」の利用が行われていた空間であった。

立地的なポテンシャルは変わっていない上、海岸と町の間に大規模な通過交通路はないため、徒歩圏における「遠征型」「郊外型」利用を目指すことができよう。

北浜地区

従来は、中心市街地における「前庭的利用」が行われていた場であった。現在は、町の裏側となっているが、都市と海岸が接し、その間に、通過交通路が存在しないという貴重なポテンシャルを有している空間であるため、中心市街地にとっての「前庭的利用」を復活させる、という整備の方向性が考えられよう。

6. まとめ

本研究の成果は以下のとおり。

海岸との付き合い方には多様な形態があったことを明らかにし、そのパタンを整理した。

地域は、複数の海岸毎に異なる付き合い方を行っていたこと、また、同一の海岸に対し、複数の地域が異なる付き合い方をしている場合があることを明らかにした。このことより、同一の海岸を地域によって、異なって認識していた可能性のあることを指摘した。

同一の海岸を複数地域が異なって利用する場合、重層的に利用する(共存できるような)仕組みがあった可能性を指摘した。

地域と海岸との付き合い方は時代によって変遷すること、現代では付き合い方の多様性が減じていることを指摘した。

海岸空間整備に係る住民参加を行う場合、直背後の住民のみを対象とするのではなく、隣接する地域や内陸の地域住民も対象にすることも必要となることを、また、空間整備の方向性の設定にあたっては、それぞれの地域と海岸の関係性を構造的かつ動態的に理解することが必要であることを示した。

以上のような背後地域と海岸の関係性の把握手法の一例を示した。

背後地域と海岸との関係性及びその変遷を踏まえた海岸空間整備の方向性の設定例を示した。

¹ 里浜づくり研究会：「里浜づくり宣言」2003.5

² 萩原定助：「別府写真帖」1912